

# ウィリアム・アダムス（三浦按針）は何を成し遂げたのか

## ——日欧交渉史における役割の再検討——

国際日本文化研究センター教授

フレデリック・クレインス

### はじめに

今日形成されているウィリアム・アダムス William Adams（日本名、三浦按針）のイメージはロマン主義の産物である。アダムスを題材とする著作では、イギリスと日本との架け橋をつくった偉人としての人物像が描き出されている<sup>1</sup>。しかし、実際はどうだったのか。本稿はアダムスが日欧交流史の中で実際に何を成し遂げたのかを再検討する試みである。

### 日本到着以前の事績

アダムスはイギリス・ケント地方の都市ジリングムに生まれた。若い頃は船大工修行をしていた。1588年のスペインによるイギリスへの侵略に際して、イギリス海軍の船長の一人としてスペイン艦隊と戦った。その後、舵手として約10年間バーバリ商会という貿易会社に勤めた。その時、貿易の傍らで、私掠行為も行っていたと思われる<sup>2</sup>。

1598年に、アダムスは、アジアへの航海を目的としたピーテル・ファン・デル・ハーゲン Pieter vander Haegen とヨーハン・ファン・デル・フェーケン Johan vander Veken<sup>3</sup>のオランダ・ロッテルダムの船団（ハーゲン船団）に舵手として雇われた。この船団の任務は、マゼラン海峡を横断すること、南アメリカのスペイン船とスペインの拠点を略奪すること、そし

---

<sup>1</sup> たとえば、William Dalton, *Will Adams: the first Englishman in Japan*. London, George Routledge and Sons, 1866 ; Richard Blaker, *The Needle-watcher*. London, William Heinemann, 1932 ; P. G. Rogers, *The First Englishman in Japan: the story of Will Adams*. London, Harvill Press, 1956 ; Richard Tames, *Servant of the Shogun: being the true story of William Adams, pilot and samurai, the first Englishman in Japan*. Tenterden(Kent), P. Norbury, 1981。一方、アダムスの事績をより客観的に扱う論考が近年に立て続けて現れるようになった。Derek Massarella は *William Adams / Miura Anjin : man / myth* という論文の中でアダムスの重要性を相対化している (*William Adams and early English enterprise in Japan*, London, The Suntory Centre, 2000)。また、2020年に一次史料に基づいてアダムスに関する情報を整理する試みとして森良和が『三浦按針—その生涯と時代』(東京堂出版)を刊行した。拙著『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』(ちくま新書、2021年)においては、史料批判に堪えうる一次史料の情報を元にアダムスの人間的な側面を浮かび上がらせようとしている。

<sup>2</sup> 日本に来る前の経歴については前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』に詳しい。

<sup>3</sup> 1611年10月23日付、ウィリアム・アダムスから見知らぬ友人たちと同国人たちへの手紙 (Anthony Farrington, *The English Factory in Japan*, London, The British Library, 1991, p. 65)。

て、喜望峰経由でオランダへ戻る途中にアジア諸国で貿易を行うことであった<sup>4</sup>。この航海は、20 数年前にフランシス・ドレーク Francis Drake とトーマス・キャヴェンディッシュ Thomas Cavendish という海賊によって実現された世界一周を再現する試みであった。このことは、多くのイギリス人が乗船していたことから窺える。そのなかにはアダムスの親しい友であるティモシー・ショッテン Thimoty Shotten も含まれる。彼は実際にキャヴェンディッシュの船に乗って航海した経験があった<sup>5</sup>。

ハーゲン船団の遠征は結局、大惨事となった<sup>6</sup>。1600 年 4 月 19 日に、五隻のうちたった一隻の船（リーフデ号）——アダムスはその船の舵手であった——は、九州の北東沿岸部に位置する豊後へ接岸した<sup>7</sup>。

## 家康からの寵遇

豊後到着後 9 日ほどして、徳川家康との接見のために出頭するようにとの命令がアダムスに届いた。船長のヤーコブ・クワッケルナック Jacob Quaeckernaek は病気で衰弱していたため家康のもとへ赴くことができない状態にあった。そのため、アダムスは同行者としてヤン・ヨーステン・ファン・ローデンステイン Jan Joosten van Lodenstein を指名し、二人は家康が在留している大坂城へ赴いた。アダムスたちは監禁状態に置かれたまま、家康から何度も尋問を受けた。尋問はポルトガル語通訳者の助けを借りて行われた。

一方、イエズス会は、アダムスや残りの乗組員たちが海賊であると非難し、もし彼らを自由にしておこならば、日本へ略奪しに戻ってくるだろうと警告すると共に、アダムスたちにとって不利に働くような数多くの証言を差し出してきた。これを受けてアダムスは最悪の事態を危惧した<sup>8</sup>。結局、家康は、リーフデ号の乗組員はこれまでのところ何の損害ももたっていないのだから、アダムスたちに処刑を宣告するのは道理や正義に反するだろうとイエズス会士に返答した。アダムスは解放されただけでなく、リーフデ号の乗組員た

---

<sup>4</sup> この船団の渡航目的については前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』に詳しい。

<sup>5</sup> 1611 年頃のアダムスから妻への手紙 (Farrington, *op. cit.*, p. 52)。

<sup>6</sup> ハーゲン船団の渡航については、前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』の中で、同船団の一隻・ヘローフ号 **Geloof** に乗船していた外科医バーレント・ヤンセン M. Barent Jansz の航海日誌、前掲のアダムスの妻への手紙および見知らぬ友人たちと同国人たちへの手紙、アメリカでスペイン人によって捕虜されたもう一隻の船ブレイド・ボードスハップ号 **Blijde Boodschap** の船長ディルク・ヘリツゾーン Dirck Gerritsz とその乗組員の尋問記録を元に詳細に分析されている。

<sup>7</sup> 1611 年 10 月 23 日付、アダムスから見知らぬ友人たちと同国人たちへの手紙 (Farrington, *op. cit.*, p. 68)。この時代、イングランドではまだ旧暦であるユリウス暦が使用されていたので、グレゴリオ暦すなわち新暦の日付にするためには 10 日を加える必要がある。本論文の中では、原史料に記載された日付を常に使用することとする。

<sup>8</sup> 1611 年 10 月 23 日付、ウィリアム・アダムスから見知らぬ友人たちと同国人たちへの手紙 (Farrington, *op. cit.*, p. 69)。

ちと共に家康から相当な額の補償金の支払いを受けた<sup>9</sup>。

ここで、なぜアダムスとリーフデ号の乗組員はこんなにも寛大に扱われたのかという疑問が提起される。このことは、オランダ船の積み荷によって説明できる。その積み荷は、大砲や銃など莫大な量の武器と弾薬から成るものであった<sup>10</sup>。ほどなくして関ヶ原合戦が行われたが、オランダ人たちが砲術師としてこの合戦に参加したことを記すイエズス会の史料が存在している<sup>11</sup>。しかし、この主張を裏付ける日本側史料は何もない。また、アダムス自身もこのことについては何も記していない。したがって、オランダ人たちが実際に関ヶ原合戦に動員されたとは考えにくい<sup>12</sup>。その代わり、そののちオランダ人たちが、1614年と1615年にかけての両大坂の陣のために、リーフデ号のもう一人の生存者であるヤン・ヨーステンを介して家康に大砲や弾薬を提供したことは確かである<sup>13</sup>。この意味で、家康にとってリーフデ号の乗組員たちは有益な存在だったのである。

## 西洋式造船の技術伝授

さらに、リーフデ号の生存者たちは家康のための二隻の西洋式帆船の造船に協力していた。アダムスの手紙からは、彼がこの造船事業を取り仕切っていたことがわかる<sup>14</sup>。リーフデ号の乗組員たちのなかには少なくとも一人の船大工がいて、ピーテル・ヤンセン Pieter Jansz という名であった<sup>15</sup>。また、前述の通り、アダムス自身も船大工の技量を有していた。彼はハーゲン船団の渡海に際して、故障したマストの修理などに才覚を十分に発揮している。

「慶長見聞集」によると、造船は伊豆国の伊東（現・静岡県）で行われた<sup>16</sup>。歴史学者の

---

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 69-70.

<sup>10</sup> このことは、当時の多くの史料によって裏付けられる。例えば、日本側史料としては「当代記」（『史籍雑纂 第二』国書刊行会、1911年、74頁）、イエズス会の史料としては、ディエゴ・デ・コウト『アジア史』（Diogo do Couto, *Da Asia. Decada XII*, Lisboa, Na Regia Officina Typografica, 1788, p. 448 [初版は1647年]）、スペイン側史料としてハーゲン船団のうちの一隻の乗組員の尋問記録「訴答」（Declaración que hizo en la ciudad de Santiago del Reyno de Chile en 10 de febrero de 1600. Madrid. Depósito hidrográfico, I. 26. D. No. 40. in: J. W. IJzerman, Dirck Gerritsz Pomp, 's-Gravenhage, Martinus Nijhoff, 1915, pp. 111-123）、そしてオランダ側史料としては、1607年のジャック・レルミット Jacques L'Hermite によるその父への手紙（*Begin ende Voortgangh van de Oost-Indische Compagnie*, f. 170）などが挙げられる。

<sup>11</sup> ディエゴ・デ・コウト、前掲書、451頁（Diego do Couto, *op. cit.*, p. 451）。

<sup>12</sup> これについては前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』で詳述している。

<sup>13</sup> 1614年11月2日付ヤン・ヨーステン・ファン・ローデンスティンから平戸商館長ジャック・スペックス宛書状（ハーグ国立文書館所蔵 NFJ 276）ほか。

<sup>14</sup> Farrington, *op. cit.*, p. 70.

<sup>15</sup> 1608年に第一書記であるマティス・ベーゼメル Matthys Bezemer によってロッテルダム市長のために作成された、スペイン、ポルトガルおよびアジアにおける囚人リストに基づく（F. C. Wieder's *De reis van Mahu en de Cordes door de straat van Magelhaes naar Zuid-Amerika en Japan*. 's-Gravenhage, Martinus Nijhoff, 1925）。

<sup>16</sup> 『慶長見聞集』富山房、1963、237-242。

マザレラ氏は「アダムスが伊東での造船に参加したことについて証拠がない」と主張している<sup>17</sup>が、「慶長見聞集」における記述はアダムスの手紙の内容と一致している上、詳細であるがために、その信憑性が高いと言える。それによると、慶長年間に家康が「唐船」を造らせたという。当時「唐船」は「外国船」を指していた。慶長年間といえば、家康に西洋式帆船の造船を依頼されたと記されているアダムスの手紙の内容と一致している。さらに、アダムスとリーフデ号の乗組員が日本で西洋式帆船を造船したと言う事実は平戸オランダ商館関連史料でも裏付けられている<sup>18</sup>。「慶長見聞集」では、造船に適した地形があったためであると、伊東が造船地として選ばれた理由についても詳細に記されている。

マザレラ氏は上述の論文で、日本の航海技術の発展におけるアダムスの果たした役割が誇張される傾向があると指摘している<sup>19</sup>。しかし、それは大きな間違いである。造船は様々な高度な技術を要する。伊東での造船は日本側史料に記録されるほどの大事業だった。家康がアダムスに造船を命じた目的は、日本の船大工への技術伝授だったと推測される。リーフデ号の元乗組員と日本人が力を合わせて西洋式帆船を完成させたこと自体に大きな意義があり、その遂行も並大抵のことではない。

また、造った2隻の船でアダムスは数回の小さな渡航に成功している。これらの航海には、リーフデ号の元乗組員も数人参加したと思われるが、そのほかの乗組員のほとんどは日本人だったはずである。彼らはアダムスと一緒に航海することにより、西洋の航海技術を吸収していった。航海術において当時の西洋人は日本人よりも高度な知識を有していた。これは日本のジャンク船に西洋人が舵手として起用されていた事実からも明白である。以上のことから、アダムスの造船および航海は、当時の日本の造船・航海技術の発展に大きく寄与したと結論付けることができる。

## オランダ東インド会社のための仲介

家康がオランダ人に対して寛大な態度を取ったもうひとつの理由として、当時の生糸貿易におけるポルトガル人の事実上の独占が挙げられる。この独占により日本の国内市場は、ポルトガル人に依存し、原料価格の高騰によって、その発展が大きく阻害されていた。オランダ人の到来は、ポルトガル人の貿易上の独占を阻止するこの上ない好機であったといえる。オランダ人とイギリス人との貿易を家康に推奨したのはアダムスであるが、家康がオランダ貿易とイギリス貿易を成立させたのは、明らかにポルトガル人の貿易独占を排除しようとする家康自身の発意であり、アダムスの巧みな交渉手腕の結果ではない。家康が

---

<sup>17</sup> Massarella, *op. cit.*, p. 17.

<sup>18</sup> リーフデ号の元乗組員アドリアーン・コルネーリセンから平戸オランダ商館長ジャック・スペックス宛てられた和暦3月4番目の日〔西暦1615年4月1日〕付書状（ハーグ国立文書館所蔵NFJ 276）。また、1611年のジャック・スペックスの参府日記にも言及がある（Isaac Commelin, *Begin ende voortganch van de Vereenighde Nederlantsche Geoctroyeerde Oost-Indische Compagnie*. Amsterdam, 1646, vol. 2, p. 79）。

<sup>19</sup> Massarella, *op. cit.*, p. 17.

オランダやイギリスとの貿易を強く望んでいたことは、1611年10月23日付のアダムスから見知らぬ友人たちと同国人たちへの手紙にも示されている<sup>20</sup>。

オランダ人が家康からの貿易許可を獲得した経緯は次の通りである。パタニにオランダ商館が設立されたとの情報を入手したアダムスは家康に働きかけ、1605年にリーフデ号の元船長ヤーコブ・クワッケルナック Jacob Quaeckernaek および商務員メルヒヨル・ファン・サントフォールト Melchior van Santvoort をパタニに派遣する許可を得た。しかし、この派遣は成果が出なかった。もともと、オランダ東インド会社の初期のアジア進出政策において日本との貿易は目標として掲げられなかったからである。

1608年2月6日付のアダムス宛の手紙のなかで、パタニのオランダ商館長であるヴィクトル・スプリンケル Victor Sprinckel は、アジアにおけるオランダ人の置かれている状況を説明した上で、日本へ渡航できないことを弁明している。また、自身の手紙と献上品を家康に手渡すようアダムスに求めている。この手紙は、日蘭の交渉においてアダムスが積極的な交渉者としてよりも仲介者として認識されていたことを示す内容となっている<sup>21</sup>。

オランダ東インド会社がようやく日本に船を派遣したきっかけは、アダムスの勧誘ではなく、ヨーロッパにおける政治的状況だった。1609年にスペインとオランダとのあいだに12年停戦協定が締結される運びとなったため、その適用に先立ってできるだけ多くのアジアの国々と条約を結ぶ必要があった。そのため、オランダ人は急速日本にも二隻の船を派遣した。

1609年にオランダ東インド会社が初めて日本に船を派遣した。駿府にいる家康へ謁見したオランダ使節は好意的に迎えられ、日本のどこでも貿易することのできる権利を得た。オランダ人が家康からこの貿易の権利を獲得できたのは、使節に同行したアダムスの仲介による成果だったとの記述がアダムス関連書籍に散見される<sup>22</sup>。しかしながら、オランダ側史料によると、オランダ使節が駿府で家康に謁見した時に、アダムスはその場にいなかった。アダムスはオランダ人を迎へに行ったところ、オランダ使節と行き違いになってしまった。駿府に戻った時にオランダ使節はすでに帰路の途についた<sup>23</sup>。オランダ人はアダムスの助力なく、家康から貿易許可を得た。とはいえ、2年後に平戸オランダ商館長ジャック・スペックス Jacques Specx が駿府で家康に、そして江戸で秀忠に謁見した時には、アダムスは

---

<sup>20</sup> Farrington, *op. cit.*, p. 71.

<sup>21</sup> 1608年2月6日付ヴィクトル・スプリンケルよりウィリアム・アダムス宛書状（ハーグ国立文書館所蔵 VOC 1054）。パタニのオランダ商館とオランダ東インド会社の日本への渡航の決定については、「平戸オランダ商館の設立経緯について」（『平戸紀要』第8号、2020年3月、pp. 28-48）で詳細に論じた。また、前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』においてもオランダ人のアジア進出に絡めて詳述している。

<sup>22</sup> Rogers, *op. cit.*, p. 41.

<sup>23</sup> ニコラス・パイクの駿府参府日記、1609年9月4日条。M. E. van Opstall, *De reis van de vloot van Pieter Willemsz Verhoeff naar Azie, 1607-1612*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1972, vol. 2, p. 354.

仲介役を務め、巧みな交渉術でオランダ人のために極めて有利な貿易条件を獲得した<sup>24</sup>。

## イギリス東インド会社のための仲介

イギリス東インド会社の場合は、アダムスの影響力がより顕著に表れた。イギリス東インド会社の司令官ジョン・セーリス John Saris が日本への渡航を決意したのは、紛れもなくアダムスからバンタムのイギリス商館宛に送付された手紙がきっかけだった<sup>25</sup>。1613年にイギリス人がオランダ人と同様に貿易上の特権を獲得できたのもアダムスの仲介の成果である。

しかし、後にアダムスから友人でイギリス東インド会社の司令官トーマス・ベスト Thomas Best への手紙に記されている駿府城での出来事は、アダムスの立場の弱さを垣間見させるものである。その手紙のなかでアダムスは、セーリスがイギリス国王ジェームズ一世から家康への書簡をみずから手渡そうとしたことに不満を漏らしている。家康の側近であった本多正純は、家康宛の書簡はどのようなものであろうと、外国人が直接手渡すというのは日本の風習にそぐわないとアダムスに答えた。アダムスがこの返答をセーリスに伝え、激怒したセーリスは、もしこの書簡をみずから手渡すことができないのなら、自分の宿泊先に帰るしかないとアダムスを脅した。一方、アダムスがセーリスに日本の風習を正確に説明しなかったとみなした正純は、アダムスに対して腹を立てた。結局、正純はセーリスの手から書簡を奪い取って、それを家康に渡した<sup>26</sup>。

このエピソードから浮かび上がるのは、日本人とイギリス人とのあいだの板挟みになっているアダムスの姿だ。家康からの絶大な信頼を受けながらも、実務者同士の交渉の場においてはその影響力はさほど大きくなかったことが窺える。ただし、その後に行われたイギリスとの貿易条件の交渉においては、アダムスが1611年のオランダ人の参府時と同様に、正純や家康と直接やりとりをしている<sup>27</sup>。オランダ・イギリス両国に対して非常に有利な貿易条件が家康によって付与されたのは、紛れもなくアダムスの功績だった。

---

<sup>24</sup> 前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』ではオランダ人と幕府との交渉におけるアダムスの仲介について詳細に記述した。

<sup>25</sup> 前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』 p. 207.

<sup>26</sup> 1613年12月1日付、ウィリアム・アダムスからトーマス・ベストへの手紙 (Farrington, *op. cit.*, p. 111)。アダムスは、1613年12月1日付、ロンドンの東インド会社への手紙でも同様に不満を漏らしている (Farrington, *op. cit.*, p. 104)。セーリスは自身の日誌にこの出来事を記載してはいないが、1613年9月8日条に次のように主張している。「皇帝〔家康〕に謁見し、我々のイギリスの慣習に従って、我々の王からの書簡を殿下に渡した」(Ernest M. Satow ed., *The Voyage of Captain John Saris to Japan, 1613*. London: Hakluyt Society, 1900, p. 130)。

<sup>27</sup> 前掲ウィリアム・アダムスから1613年12月1日付トーマス・ベストへの手紙および1613年12月1日付ロンドンの東インド会社への手紙。

## 浦賀への誘致活動

アダムスが結果的に成し遂げられなかったことの事例としては、貿易港としての浦賀への誘致が挙げられる。当時スペインとの貿易を拡大しようと考えていた家康は、浦賀を開港し、アカプルコ・浦賀・マニラを結ぶ貿易ルートの確立を構想していた<sup>28</sup>。この構想の目論みがあったためか、アダムスは家康から浦賀に近隣している逸見の領地を授かり、浦賀にも屋敷を与えられた。平戸オランダ商館長ヘンドリック・ブラウエル Hendrik Brouwer が1612年に家康および秀忠への謁見を終えた後に、アダムスはブラウエルを浦賀に案内し、停泊地を視察する機会を設けた。しかし、ブラウエルはアダムスの説得に応じず、平戸ですでに商館を建てたことを理由に商館の浦賀への移転を断った<sup>29</sup>。

この浦賀への誘致活動は、セーリスの江戸参府の際にも同じ経過を辿った。アダムスの熱心な勧誘に応じて浦賀を視察したセーリスは、浦賀が平戸よりも良好な港であるとの評価を日記の中で記している<sup>30</sup>。しかし、1613年11月26日に商務員から成る委員会での議論の結果、セーリスはイギリス商館の設立地を平戸に決定した<sup>31</sup>。これにより、アダムスによるオランダ人・イギリス人への熱心な働きかけにもかかわらず、浦賀を国際港として整備するという家康の構想は実現しなかった。

アダムスの説得に応じずに行われた、このオランダ・イギリス両会社の平戸商館設置は、以後の日蘭・日英関係に大きな影響を及ぼした。合理的に考えると、商館を江戸のすぐ近くの浦賀に設置した方が利点が大きかった。浦賀を拠点とすれば、平戸藩主や長崎奉行の介入を受けずに、幕府と直接的なやり取りができたはずである。また、江戸から遠く離れた平戸では、両会社が幕府に与える影響力は大きく限定される。この設置場所の選択はイギリス商館が1623年に日本から撤退した一因であると推測される<sup>32</sup>。なお、オランダ商館も1641年に余儀なく長崎に移転させられている。

## 対スペイン外交とキリシタン弾圧

アダムスの影響力が最も顕著に及んだのは家康の対スペイン外交であった。アダムスが成長期をおくった時代にイギリスは絶えずスペインによる侵略の脅威にさらされていた。イギリスにいるカトリック教徒はスペイン人の戦略の重要な担い手となることが想定されていた。まず、秘密裡に宣教師をイギリスに送り込んで、イギリスのカトリック教徒と手を組む。このカトリック教徒が反乱を起こし、スペインの精鋭部隊の上陸を助ける。次に、カトリック勢力とスペイン軍が力を合わせてプロテスタントの女王エリザベスの政権を転

<sup>28</sup> 拙稿「徳川家康の外交—外国の史料に見る家康像」(『徳川家康—その政治と文化・芸能』宮帯出版社、2016年、pp. 132-147)。

<sup>29</sup> 1613年1月29日付ヘンドリック・ブラウエルよりピーテル・ボット総督宛書状(ハーグ国立文書館所蔵 VOC 1056)。

<sup>30</sup> Satow, *op. cit.*, p. 136.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 183.

<sup>32</sup> この経緯については、前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』に詳しい。

覆させ、カトリックの女王としてスコットランド元女王メアリーをイギリスの王位に就かせるという戦略だった<sup>33</sup>。

アダムスはこのスペインの戦略について熟知していた。しかも、1588年にスペイン艦隊がイギリスへの直接攻撃を行った時に、アダムスはイギリス王立海軍の船長として海戦に参加している<sup>34</sup>。その経験を背景に、このスペインの脅威についてアダムスは家康に詳細に説明したはずである。このことを裏付けるのは、スペイン側史料である。セヴィリャのインド総合文書館に保管されているスペイン使節ディエゴ・デ・サンタ・カテリーナ Diego de Santa Catalina の報告書では、スペイン人側が不利になるようにアダムスが家康に対して進言を行ったと記されている<sup>35</sup>。それによると、スペイン人がまず宣教師を送り込み、日本の多数の国民をキリスト教徒に改宗させ、その後スペイン人がそのキリスト教徒と共謀して日本を征服し、スペイン国王の植民地にするのだとアダムスが家康に伝えたという。また、同史料はこのアダムスの進言が直後に起こるキリシタン弾圧の一因であったと結論付けている。スペイン人とアダムスとのあいだの不和については、オランダ側史料やアダムスの手紙の中でもたびたび言及がみられる<sup>36</sup>。

さらに、スペイン使節のセバスティアン・ビスカイノ Sebastián Vizcaíno が1611年に江戸湾測量の許可を得たと知ったアダムスは家康のもとに駆けつけて、測量はスペイン軍の日本侵略の準備であると訴えた<sup>37</sup>。この進言を受けた家康はその後、スペイン外交を断絶させた。

以上のようにアダムスはオランダとイギリスのためには有利な貿易条件を家康から獲得した一方で、家康への進言を通じて、すでにぎくしゃくしていた対スペイン外交に終止符を打たせることになったということが言える<sup>38</sup>。

---

<sup>33</sup> 当時のイギリスとスペインとの関係については、前掲『ウィリアム・アダムス—家康に愛された男・三浦按針』に詳しい。

<sup>34</sup> 大英図書館ハーレアン文書に、スペイン艦隊と戦った王立海軍に所属した船のリストが残っており、その中に131番目の船としてリチャード・ダフフィールド Richard Dyffylde 号が記録され、その船長として William Adams の名前が明記されている。William Murdin, *A collection of state papers relating to affairs in the reign of Queen Elizabeth, from the year 1571 to 1596*. London: William Bowyer, 1759, p. 618.

<sup>35</sup> *Relacion de lo que sucedio a tres religiosos*. Archivo General de Indias, Seville, 1615.10.15 (『大日本史料』第十二編之十二、pp. 420-421)。

<sup>36</sup> たとえば、1612年4月5日ジャック・スペックスよりウィリアム・アダムス宛手紙(ハーグ国立文書館所蔵 VOC 1054)、前掲の1611年のスペックスの参府日記、前掲1613年1月12日付アダムスよりスポールディングへの手紙(Farrington, *op. cit.*, vol. 1, p. 77)など。

<sup>37</sup> 「セバスティアン・ビスカイノ航海旅行報告」第8章27節(フアン・ヒル著、平山篤子訳『イダルゴとサムライ』法政大学出版局2000年、p. 385)。

<sup>38</sup> スペイン人のための家康への仲介を拒んだということについて、アダムス自身も1613年1月12日付のオーグスティン・スポールディング宛の手紙で証言している(Farrington, *op. cit.*, p. 77)。



## 結論

家康の死後、アダムスの立場は大きく変わった。それは、秀忠が家康の側近から距離を取り、別の側近を起用したからである。日本に到着した最初のイギリス人であることおよび西洋の造船・航海技術の伝授も特筆すべきことであるが、アダムスの成し遂げた最も目覚ましい成果を要約すると、日本におけるオランダおよびイギリスの自由貿易の確立、そしてスペイン勢力の排除という外交上の二点が挙げられる。この背景には、当時のヨーロッパにおけるプロテスタントのイギリス・オランダとカトリックのスペイン・ポルトガルとの対立が大きく関係している。

一方、自由貿易を押し進めようとしたアダムスの進言がキリシタン弾圧、そしてその延長としての鎖国政策に繋がったことは、なんとも皮肉的なことである。

## 附記

本論文は元々2011年にフランス語で書いた論文（“Un Japonais naturalisé? Identité et rôle historique de William Adams,” *Devenir l'autre. Expérience et récit du changement de culture entre le Japon et l'Occident*, Éditions Philippe Picquier, Arles, 2011, pp.19-29）を井岡詩子氏に和訳して頂いた原稿から派生している。しかしながら、その後の研究成果を踏まえて書き直したところ、元のフランス語論文とはまったく異なる趣旨と内容の論文に変わっている。妻桂子は、原稿を綿密に校閲し、読みやすい文章にしてくれた。改めて厚く感謝申し上げます。なお、本論文は科学研究費助成事業「近世初期における日蘭関係の構造に関する基礎的研究」（課題番号19K01010）の助成を受けて行った研究の成果である。